



平成 27 年 4 月 10 日

各 位

会 社 名 株式会社ジーンテクノサイエンス  
代 表 者 名 代表取締役社長 河 南 雅 成  
(コード番号：4584 東証マザーズ)  
問 合 せ 先 執行役員管理部長 上 野 昌 邦  
(TEL. 011-876-9571)

### 平成 28 年 3 月期に係る業績予想に関するお知らせ

当社と富士製薬工業(株)が共同開発を開始し、我が国のガイドラインに基づく最初のバイオ後続品として平成 25 年 5 月 31 日に上市され、富士製薬工業(株)及び持田製薬(株)により販売が行われている G-CSF\*<sup>1</sup> (顆粒球コロニー形成刺激因子、一般名：フィルグラスチム) に関して、両社の好調な販売状況を受け、当社売上高が大幅に増加する見込みとなりましたので、平成 28 年 3 月期に係る業績予想について下記のとおりお知らせいたします。

\*<sup>1</sup>G-CSF は、白血球の一種である好中球の分化・増殖を促進させるほか、骨髄からの好中球の放出を促進し、また、好中球機能を高める作用があります。このため、G-CSF 製剤は、がん化学療法による好中球減少症や骨髄移植時の好中球数の増加促進などに使用されております。

#### 記

#### 1. 平成 28 年 3 月期業績予想

(単位：百万円)

	売上高	営業利益	経常利益	当期純利益	1 株当たり 当期純利益 (円)	(ご参考) 研究開発費
平成 28 年 3 月期 (予想)	1,022 (注) 2	△602	△573	△575	△239.14 (注) 3	739
(ご参考) 平成 27 年 3 月期 (予想) (注) 1	310	△970	△946	△948	△397.47	817
(ご参考) 平成 26 年 3 月期 (実績)	301	△512	△516	△519	△240.15	412

(注) 1. 平成 27 年 3 月期の業績予想につきましては、直近の業績予想 (平成 27 年 2 月 12 日付四半期決算短信にて公表) に基づき記載しております。なお、平成 27 年 3 月期の業績見込みに関して、本業績予想を修正すべき重要な乖離は生じておりません。

2. 平成 28 年 3 月期の売上予想につきましては、保守的に確度の高い G-CSF の売上のみを計上しております。

3. 平成 27 年 4 月 3 日付で、新株予約権の行使により、発行済株式数が 12,000 株増加しております。業績予想における 1 株当たり当期純利益は、当該増加株式数を反映して算定しております。

#### 2. 売上予想について

平成 28 年 3 月期は、上記のとおり G-CSF に係る売上高の増加が見込まれますが、これに加え、現在開発中の複数のバイオ後続品について開発が進展して参りましたので、製薬企業とのアライア

ンスを実現し、契約一時金収入等の獲得によりさらなる売上の増加を目指します。また、ORTHOREBIRTH(株)との人工骨に関する資本業務提携をはじめとし、ヘルスケア関連事業につきましても着実に成果につなげるよう進めてまいります。なお、現時点ではこれらの契約一時金収入等あるいはヘルスケア関連事業に係る売上及び利益を合理的に算出することができないことから、業績予想には織り込んでおらず、各案件が確定次第速やかにお知らせいたしてまいります。

### 3. 損益予想について～経営の安定化と研究開発活動の加速化

平成 27 年 3 月期までは、G-CSF の販売により得られる利益\*<sup>2</sup>が固定費\*<sup>3</sup>を下回っておりましたので、手持資金の全てを研究開発費に充当することができず、財務的に不安定な状況にありました。一方、平成 28 年 3 月期以降はこの状況が逆転し、G-CSF の販売により得られる利益が固定費を上回る見込みとなりました。G-CSF の利益により固定費負担による手持資金の流出がカバーされることで、手持資金の大部分を研究開発費に充当することが可能となり、会社の継続性を保ちつつ研究開発活動を進めることが可能になった意義は大きいと考えております。加えて、固定費を上回る余剰利益を研究開発費に充当することで、研究開発活動のさらなる加速を図ることも可能になるものと考えております。

平成 28 年 3 月期は、市場環境の好転と業績改善を背景に積極的な研究開発活動を継続する予定であります。このため、研究開発費も前期（平成 27 年 3 月期）予想とほぼ同水準の 739 百万円となる予想であります。G-CSF の販売による利益の一部を研究開発費に充当することができることから、当期純損失は研究開発費よりも少ない 575 百万円となる予想であります。

\*<sup>2</sup>G-CSF の販売により得られる利益とは、G-CSF に係る売上高から売上原価並びに販売費及び一般管理費に含まれる支払ロイヤリティを控除した、G-CSF の販売により得られる実質的な利益を意味します。

\*<sup>3</sup> 当社はファブレス型の研究開発企業であり、研究開発費の大部分が外注費（変動費）となります。このため、当社における固定費とは、販売費及び一般管理費から研究開発に係る外注費及び支払ロイヤリティを控除した、研究開発活動の多寡にかかわらず発生する費用を意味します。

### 4. G-CSF での成功事例と今後の展望

これまで日本のジェネリック医薬品普及率は長らく低水準で推移しておりましたが、ここ数年のジェネリック医薬品使用を後押しする動きが活発になってきています。さらに、臨床試験などを行い開発されたバイオ後続品に対する理解も急速に変化しつつあります。このような流れが大手の医療機関が G-CSF のバイオ後続品を採用し、販売に関して順調な立ち上がりにつながったものと感じております。

当社のバイオ後続品事業の第 1 弾である G-CSF は、会社の継続性を支えることができる規模にまで成長してきています。また、当面は G-CSF に続く第 2、第 3 のバイオ後続品開発が経営成績に影響を与えますが、バイオ後続品の認知度の高まりをビジネスチャンスの拡大と捉え、積極的に研究開発投資を行うことにより、パイプラインを拡充し、その収益の最大化を目指してまいります。

### 5. 今後の見通し

本件につきましては、平成 27 年 3 月期決算短信において、平成 28 年 3 月期の業績予想として公表する予定であります。

以上

（ご参考）

本件に関しましては、当社ホームページ (<http://www.g-gts.com>) に社長メッセージを掲載する予定ですので、合わせてご高覧下さいますようお願い申し上げます。